

お兄ちゃんへ「ありがとう。」

福井県 坂井市立三国中学校 1年
向野 一空海（むこうの いくみ）

「みふうにびよおいは、ろこれすか。」
道を歩いていた僕達は、そうおじさんに呼び止められた。
「み、ふう、に、びよ、お、いは、ろ、こ、れ、す、か。」
顔を見合わせている僕達に、おじさんはもう一度、今度は一言一言区切って、ゆっくり言ってくれた。
「何言ってるか分からんし、行こうぜ。」
と友達が言った。みんなもその言葉につられ歩き出した。だけど、僕の足はどうしても前に出なくて、かと言って、僕もおじさんの言ってることが分からないから、答えてあげることもできなくて、うつ向いていた僕が顔をあげると、おじさんの耳に小さな機械がついているのが見えた。僕はそれをテレビで見たことがあった。耳の悪い人がつける機械。そして、「耳の悪い人は、自分の声がひびかないから、話すことも上手にできない。」
と、そのテレビで説明していた。僕の心臓はドッキンドッキンと大きく跳び上がって、頭の中は真っ白になった。ただただ、
「どうしよう。どうしよう。」
そう思った。
「いくみ、何してるんや、はよ行くぞ。」
先に行った友達がそう叫んだ。
「あ、ああ。」
そう返事した後、僕の足は走り出した。友達に追いつき、何もなかったかのように歩き出した。五十メートルぐらい歩いた時、やはり気になって振り向いてみた。おじさんは、まだうろうろしていたが、振り向いた僕に気付くと、ニコッと笑って、そして手を振ってくれた。しかし僕は言ってることが分からなくて、答えるにも手話ができないから、どうしようって悩んで、でも友達が待ってるから仕方ないって、友達のせいにして、逃げた、すごくすごく弱虫な僕に。僕は前を向いて、たくさん友達と話した。いつものように大声で笑って、じゃれあった。すごくすごく楽しいはずなのに、僕が思ったことは、
「楽しくないなあ。」
だった。
姉の人権作文の表彰式に行ったのは、こんな体験をした二、三日後のことだっ

た。式が進み、作文発表になった。退屈で妹と遊んでいた僕は、手が止まった。

「ぼくは、～え～ら...。」

聞いたことのある話し方。僕はくぎづけになった。そのお兄ちゃんもやっぱり耳に小さな機械をつけていた。小さい時から耳が悪く、ほとんど聞こえないこと。それに伴って、言葉が上手に話せないこと。そして、耳が聞こえない人の恐怖。色々なことがあって自分がそのことに負けそうになって、もがき苦しんだこと。でも今は、先生や友達の支えがあるおかげで、前を向いて頑張る強さを手にいれたこと。そのお兄ちゃんは、聞いているみんなが、なるべく聞きとれるように、大きな口を開けて、ゆっくりゆっくり、一生懸命話していた。僕はいつしか、必死で涙をこらえていた。瞬き一つしたら、ポロポロと涙が落ちてしまいそうで。悲しかったんじゃない。腹が立ったんだ。あの時、ちゃんと答えず、逃げた自分に。お兄ちゃんが読んでくれた作文を聞いて、耳が悪い人が、耳が聞こえないことや、言葉が上手に話せないことでたくさんの人の偏見の目に、どれだけ傷付き、嘆き苦しんでいるか、僕にも伝わったから。そして、お兄ちゃんの作文を聞いたから分かったこともたくさんあった。手話ができないから、どうしようと悩まなくても、その人の目を見て、口を大きく、ゆっくり開けて話せば、僕達が言いたいことを伝えることができるんだということ。そして、障害者だからといって身構えるんじゃないで、健常者と同じように接してほしいと思っていること。僕はなぜ、あのおじさんに、

「ゆっくりで大丈夫ですよ。」

と、手をそえ、分かるまで聞こうとする時間を持たなかったのだろう。もしかすると理解し、答えを言ってあげられたかもしれないのに。そしたらあのおじさんは、あんなにも悲しい笑顔をせずすんだはず。僕は、すごくすごく後悔したり、反省した。

僕は中学生になったら人権作文を書こうと決めていた。たくさんのことを教えてくれた、あのお兄ちゃんに「ありがとう」を伝えたかったから。僕はお兄ちゃんの作文に、「強さ」と「勇気」をもらったよ。だから今度、耳の不自由な人に会ったら、いや、どんな障害者の人に会ったとしても、僕は怖がらないで、その人の目を見てたくさんたくさん話したい。そして、自分で出来ることは手をかさない。出来ないことだけ、そっと手をそえようと思う。それがお兄ちゃんが言った、「健常者と同じ」ということだと思うから。お兄ちゃん、逃げない「強さ」と「勇気」を教えてくれて、ありがとう。